

奈良と福井に流れる

心の歴史

令和3年に友好都市となった奈良県生駒市と福井県敦賀市には、それぞれ親切運動を推進する支部があり、両支部は令和4年度より交流をスタート。今年度はその一環として、生駒支部が主催する作文コンクールの入賞作品を敦賀支部でも審査協力し、特別賞を贈呈。去る11月11日(土)、表彰式が行われた生駒支部を取材しました。

生駒支部は中央本部(東京)に先駆け、全国で初めて作文コンクールをスタートするなど、子どもたちの豊かな心の育成に力を注いできました。今年度、55回目となる歴史ある表彰式には、一家そ

ろって来てくださった方も多く、用意していた椅子が足りなくなるほど。改めて、同コンクールが地元の方々に親しまれていることを感じました。

当日は、おめでとうの心を込めて宮本しげ子副代表が自ら宛名を筆耕した賞状を、玉置成一代表から受賞者へ贈呈。通常の表彰の後、敦賀支部で選考した特別賞『人道の港つるが賞』を3名に贈りました。



「人道の港つるが賞」の受賞者



生駒支部の役員の皆様(左列2番目より宮本副代表、その左が玉置代表)

敦賀港は、1920年代にポランド孤児、1940年代には「命のビザ」によって上陸したユダヤ難民を受け入れたことから「人道の港」といわれており、難民を温かく迎え入れた当時の敦賀市民の親切や思いやりは、現在も市民の心の原点として大切にされています。

表彰式同日、福井県本部主催の「県民のつどい」が敦賀市で開催

されたため、この日は敦賀支部・高畑徹代表からのメッセージが届けられ、敦賀の心の原点は生駒の皆さんにもしっかりと伝えられました。

県を超えた交流は現在、全国でも両支部だけ。支部としての歴史は生駒の方が少し先輩ですが、今後の交流によって両支部の親切運動に新たな風が吹き、さらに広がることを願っています。

生駒の思い出

幻のレインボーラムネ

宮本副代表にいただいたカラフルなラムネは、「イコマ製菓本舗」の製品。コロんとした見た目のかわいさに、テンションが上がりました。ラムネは口の中でサーっと溶け、ピーチ味のさわやかな甘みが広がり、後を引くおいしさ。

小さな工場丁寧な作られているため、現在ふるさと納税の返礼などでしか入手できない「幻のラムネ」といわれています。



お寺にある「小さな親切」の石碑

生駒山の中腹にあり、「生駒の聖天さん」として市民に親しまれる宝山寺。商売繁盛のご利益で関西全域から信仰を集め、発足当初より生駒支部の活動を支えています。

その境内には、支部設立20周年を記念した「小さな親切」の石碑が建立されています。お寺の中にあるのは全国で唯一。風格ある佇まいで、生駒の活動を見守ってくれています。

